

仮象の存在性格と二元論

——ヘーゲル『論理学』本質論の一研究——

竹 島 尚 仁

序

ヘーゲルは論理学の本質論の部分をもっとも難解な部分と呼んだ⁽¹⁾。「すべてが自己に関係すると同時に、自己を越え出ているというように定立されている」⁽²⁾。つまり本質論で登場する規定は、自己関係としての直接性と自己を越え出て他との関係に立っているという媒介性とを持っており、直接性と媒介性とを結合しているわけである。直接性と媒介性との矛盾として捉えられている事態は、それぞれの表面的な意味を越えた含意を持っている。本質論では、力とその発現、内なるものと外なるもの等の関係が扱われ、基本的に本質的存在と直接的存在との関係が論じられており、そこには二つの異質な存在が登場しているのである。直接性と媒介性という形式的な規定は、これら二つの異質な存在の連関を論じるために導入されているのである。この異質性は単純化するなら、感覚的なものと超感覚的なものとの間にある異質性である⁽³⁾。

さて、直接性と媒介性との結合関係を原理的に主題化して論じているのは、本質論の「仮象」と題された章であり、そこでは当の結合関係が「反省」の構造として分析されている。直接性と媒介性という論理形式のもとで記述される仮象と本質は、反省の構造を通じて規定されることになる。反省は、定立的反省および前提的反省、外的反省、そして規定的反省という形態に分けて論じられる。反省が規定的反省へと高まるためには外的反省を経なければならず、規定的反省は外的反省を不可欠の前提としている。ところでこの外的反省は、直接的なものを反省の彼岸に置くものであり、一見したところ二元論的な立場に立つ反省形態であると思われる。そうであるとする、反省の完成形態である規定的反省も、二元論的な立場を不可欠の前提としていることになると思われる。しかし他方、二元論を保持したままであるような論理構成を

ヘーゲルが承認するはずはなく、外的反省の規定的反省にかけての論述の中に、二元論を克服する論拠が見出されると期待される。

そこで本稿は、反省、とりわけ外的反省を吟味し、外的反省を克服する論理がどれほど明瞭かを考察するものである。また同時に、外的反省が関係づけるものが直接的なものと本質であるから、これら二つの異質な存在の同一性と区別を示すことがどれほど成功しているかを吟味することも必要となる。とりわけ両者の区別が明らかにならないということを示したい。

本質と直接的存在との関係、反省の構造の検討に先立って、まず論理学の基本的エレメントを明確にし、二元論に対するヘーゲルの認識を確認しておこう。

I ヘーゲルの論理学と二元論

本質論は論理学の一部であり、論理学が成り立っている基本的なエレメントを前提にしている。それゆえ本質論は、純粹知、無限的思惟を基本的な展開の場としているのである。この思惟の運動を通じて内容展開の必然性が保証されるのであり、また学の内容は学の外から与えられるというのではなく、思惟の否定作用ないし規定作用を通じて形づくられ、およそ他者に依存することのない思惟の自由が満足させられるのである。このようにして得られる学には、自己構成的性格を見出すことができるであろう⁽⁴⁾。自己構成的性格を満足させる無限的思惟は、「内容そのものに内在している魂」(TW5, 17)と言われ、とりわけ思惟の運動とその内容の規定性とを分離しないことを特徴としている。あるいは、思惟の運動を形式とするなら、形式と内容を分離しないところに無限的思惟の特徴の一つがあるという言い方もできるであろう。

さて、論理学は内容を捨象した形式的なものであると考えられるのが普通であろう。このように考えられる時、論理学の内容はその外部から与えられることになる。ヘーゲルによれば、このように形式と内容とを分離する立場は、客観的な世界あるいは対象的な世界が、自立的に存在するとか、あるいはそれだけで直接的に規定されたものとして前提されるという、二元論的な世界像に依拠していることになる。形式と内容の分離から二元論的な世界像が成り立つ理屈を、ヘーゲルは次のように述べている。「質料と形式、対象と思惟との差異が……よりはっきりと取り上げられる場合には、両者のおのおのは他方から分け隔てられていた領域であることになる。したがっ

て思惟はそれが素材を受け取ってこれを形式づけることによって自己を超え出るのはなく、思惟が素材を受け取りこれに適合する運動は依然として思考そのものの一つの変容であり、このことによって思惟は自分の他者になるのではない。そして自己意識的な規定作用はもともと思惟だけに属するのであり、したがって思惟は対象へのその関係においてもまた自己を超えて対象のもとに達するのではなく、また対象は物自体として相変わらず全く思惟の彼岸でありつづけるのである。」(TW5, 37) つまり、思惟が素材を受け取りこれに適合し、素材に形式を付加することによって素材を規定する運動は、対象に属するのではなく、思惟それ自身に属するものである。これに対応して、素材を提供する対象そのものは、思惟の規定作用の及ばないところにあり、無規定的なものであり、したがって物自体と呼ばれることになる。こうして、思惟の規定作用が及ぶか全く及ばないかに応じて、領域が二分されるわけである。

このような基準によって領域を二分することは、ある意味で自然なことであり、それをもとに作られる二元論的な世界像が、そう簡単に崩れるとも思われない。しかし、ヘーゲルにとってこのような二元論を克服することが課題であった。それは、二元性を最初から捨て去るというものではなくて、二元性を見据えその成立を説明しつつ、二元性を克服することであった。

II 存在論と本質論との相違

我々は普通、諸事物を存在するものとして把握し、直接的に捉えられている規定を通して事物を把握しようとする。しかしそれに留まることなく、直接的に現れている限りでの事物を超えて、その本質を求めらるであろう。この時、「諸物の直接的な存在は、……いわば外皮あるいは帳として表象されており、この背後に本質が隠されている」(Enzy 3. §112 Z.)と考えているであろう。その事物が何であるか、という問いには、直接的に現れているとおりに、それは白くて、これこれの大きさで、……という解答もありうるが、それは塩であるという解答もありうる。前者の解答は、直接事物において現れている規定を、そして後者の解答は、直接的に捉えられない本質的な規定を述べていると考えられる。

最初の解答に含まれうる規定は、論理学の存在論で扱われる論理規定を基礎にしている。存在論における規定を大まかに区分すると、質、量、そして度量となる。たと

えば白という質は、赤でない、黒でないなど、他者ではないという否定で成り立っている。このように、基本的に存在論における規定は、直接的な存在を根底に持っており(TW6, 24など)、その規定を作りなす否定は、本質的に他者でないという仕方で成り立っているから、他者への関係である(TW6, 33)。

このような観点から事物が考察される限り、それらは直接的に捉えられているのであり、それ自身の内で根拠づけられたものとは見られない。事物を根拠づけるものをそのような規定のうちに求めても、その規定が他者への関係として他者に依存するものである以上、究極的な根拠とはなり得ないのである。そこで、それらの規定を根拠づけられたものとして示す根拠が、本質として登場する。

このような存在論における規定に対して本質はどのように関わるのであろうか。本質においては、「存在と存在のあらゆる規定性[大別すると質、量、度量]が、相対的にではなくそれ自身において止揚されている」(TW6, 39)のであり、「存在のすべての規定性に対して没交渉であり、他在と他者への関係が端的に止揚されている」(TW6, 14)と言われる。したがって、本質は「存在の絶対的否定」(TW6, 19)として、存在と存在のあらゆる規定性を空無なものとして示すものなのである。それゆえまた、本質は、存在ではないものであり、存在の他者であるとしても、存在に対して存在論における規定関係とは異なる規定関係に入ることになる。存在論においては、或るものと他者との規定関係が水平的な関係⁽⁵⁾(もちろん普遍者同士の関係ではない)であり、この関係が支配的であるとすれば、本質論においては、他者への規定関係が垂直的な関係⁽⁶⁾であり、この関係が支配的なのである。

それでは、本質における垂直的な規定関係の成り立ちを、実際の論述に即して見ていくことにしよう。その際、垂直的な関係に立つ二つの異質な存在がどのような仕方で記述されているかが考察の焦点となる。

Ⅲ 本質の構造

1) 本質的なものと非本質的なもの

ヘーゲルがまず取り上げる本質的なものと非本質的なものとの関係は、直接的に現れている規定に対して本質をその背後に対置するという、先に述べたような常識的な理解にそったものだと言えるだろう。

常識的な理解では、非本質的なものは本質との関係において価値が減じられているが、それでもやはり本質との連関を離れてそれだけで存立するかのように考えられているであろう。しかし、ヘーゲルによれば本質は、存在論における規定を絶対的に否定しており、それをそれだけでは存立しない空無なものだと示すものである。

また逆に、非本質的なものは空無のものであり二次的なものであるから、本質が得られれば切り捨てられてもよいものだと考えられるかもしれない。しかしヘーゲルは、非本質的なものを捨象する、抽象的な本質観にも反対する。「人々はしばしば本質というカテゴリーを抽象的な仕方で使用し、そして事物の考察に際して事物の本質を事物の現象の規定された内容に無関係なもの、それだけで存立するものとして固定する」(Enzy 3. § 112 Z.)。彼は、むしろ非本質的なものに本質的なものが現れているということを認め、本質が非本質的なものの彼岸にあるのではなく、非本質的なものに現れている具体的なものであることを認めるのである。その意味で彼は非本質的なものを積極的に評価する。

以上二つの観点から、本質的なものと非本質的なものとの関係の外面性は、否定されなければならない。つまり、本質的なものも非本質的なものそれだけで存立するのではなく、要するに両者は「現れる」という関係の中ではじめて存立するものである。もしこのことが捉えられていないならば、本質的なものと非本質的なものは、存在の点で「同等の価値」(TW6, 18)をもち、水平的な規定関係に入り、本質とその現れに特有な垂直的關係が捉えられていないことになるであろう。そこで、非本質的なものという、水平的規定関係を予想させる概念が捨てられ、仮象という概念がそれに取って代わるのである。仮象はそれ自身において否定されていることを表示している概念である。ただし、それと同時に、仮象は、否定されながらも本質の現れとして本質と区別されるのであるから、本質に対する何らかの独立性をもっているものである。

2) 仮象の存在性格

ヘーゲルは、哲学的な観点から、仮象がスケプシス主義の現象~~Phänomen~~や観念論の現象~~Erscheinung~~と同じものであると語っている(TW6, 20)。スケプシス主義は現象が存在するということを許さず、また観念論も現象は主観との関係を離れて存立するような物ではなく、その認識は物自体の認識とはなり得ないと見なした。しかしなが

ら、両者ともに、現象のもとに直接的に規定された多様な内容を存続させていた。それゆえ、実際のところ両者の現象は別の意味で存在すると言われうる地位を与えられているとヘーゲルは分析して見せる。現象の根底としての存在や物自体が否定されようと、現象そのものの直接性、すなわち存在は残されているというわけである。スケプシス主義や観念論は、「規定性としての存在、すなわち直接性を超えでない」(TW 6, 20)のである。ヘーゲルにとって、規定内容が直接的に与えられたものとされる限り、両者は内容と形式を二分した先の二元論的な立場に立っていることになる。なるほど、論理学の序文とは異なり、ここでは思惟の規定作用の彼岸にあるのは物自体ではないが、現象の直接性が規定作用の彼岸になっており、ヘーゲルの目には大差ないからである。このような直接性が前提される限り、規定作用は常に制約されたものであらざるを得なくなるのである。

スケプシス主義と観念論のうちに、ヘーゲルが自らの仮象概念の先例を見ているのは、両者によって現象が存在しないものであり、空無なものであることが述べられているからである。しかしそれと同時に彼は両者の現象概念が不十分であることをも指摘していた。そこで、「仮象を本質から区別している諸規定が本質そのものの諸規定である」(TW6, 21)ということと、さらに「仮象であるところの本質の規定性が本質そのものの中で止揚されている」ということが示されるべきなのである。このことを示すために、規定内容の直接性がいかにして解消されるのかということが問題となるわけだが、この問題は論理学において二元論的な経験的立場がどのような論拠に基づいて克服されうるのかを示すという問題と読み変えられる。なぜなら、他在から自由になっていない観念論を称して「絶対的な経験論」(GW9, 136)と言ったことからすると、これは経験論的な立場だからである。

こうしてヘーゲルが自らに引き受ける課題は、いかにして仮象の直接性が否定されており、仮象が徹底して空無であるかを示すことである。しかし同時に、それは、仮象の直接性がいかにして生じうるのか、その論拠を示すことでもある。なぜならこのことによって、仮象の直接性が否定される根拠も得られると期待されるからである。

空無性と直接性という、仮象の存在性格を説明する鍵となっているのは、本質が備えているこの否定性であり、これを「自己関係の否定性」と捉えるところにある。仮象の章においても、仮象と本質との関係を記述する手段はほとんど出揃い、それに従って仮象の空無性と直接性が説明されている。しかし、本格的な議論は次の「反省」

の節でなされているので、仮象の節の内容を交えながら、反省の構造をみてみよう。

3) 反省の構造と二元論

自己関係の否定性は、「矛盾」した在り方をしている。否定性は「～を否定する」という働きであるが、否定性が自己関係的であることによって、否定する対象が否定性自身となる。すると、否定性が否定性自身を否定するのである。そして、否定性自身の否定によって、「単純な自己相等性、言い換えれば直接性」があらわれる。それゆえ、「それ〔自己関係の否定性〕は、否定性自身でありかつ否定性自身でないのであり、しかも一つの統一のうちでそうなのである」(TW6, 25)。こうして反省の論理は、否定性と否定性の否定としての直接性が対立概念であるということをもとに組み立てられている。

まず反省は、否定性の自己関係として、否定性を否定し、直接性を定立する。本質の自己同一性が「自己への還帰」として成り立つ。しかし、直接性は否定性の否定として媒介されたものであり、「自己を止揚する直接性」(TW6, 26)であり、被定立存在 *Gesetzsein* と呼ばれる。ここで止揚される直接性は、本質の否定性の否定から導かれたのだから、本質の直接性であると考えられる。しかし、ヘーゲルが「反省された直接性」(TW6, 22)と呼ぶ、この直接性が、仮象の直接性にほかならないとされる⁽⁷⁾。「ただ否定的なものの自己への還帰としてあるような、この直接性が、仮象の規定性をなし、以前には反省する運動がそこから始まるかに見えた直接性なのである」(TW6, 26)。こうして、仮象が本質に対してもつ独立な側面が見かけのものであるにすぎないことが明らかにされている。反省が、直接性を自己への還帰として、すなわち否定されているものとして示す限りで、反省は定立的反省である。定立的反省は、仮象の空無性の側面を明らかにするのに寄与している。

しかし、直接性はなんらかの存立をもつはずである。そうでないなら、そもそも直接性の止揚が成り立たなくなるであろう。直接性は、直接性の止揚という定立の働きに先だって定立されていなければならない。「前提において、反省は自己への還帰を反省に対して否定的なものとして規定する」(TW6, 27)。つまり、反省は前提する働きとして、自己への還帰として常に否定されたものであった直接性を、反省に対して対抗するものと規定するのである。この作用が前提的反省であり、被定立存在の直接性が保持されているのであるから、前提的反省は、仮象の直接性の側面を明らかにする

のに寄与していることになる。

しかしながら、定立的反省と前提的反省とはただ並存しあっているのではなく、相互に他方の反省形態へと転ずる必然性をもつ。というのも、否定性が自己を否定して直接性に至り、この直接性がまた否定されて否定性へと戻るという循環があり、両反省形態はこのような循環的な統一のうちに捉えられているからである。反省の構造を本性とする本質は、「その直接性を否定性としてその否定性を直接性として規定する」(TW6, 24)、無限の運動を含んでいるのである。

この論述の中で、仮象の契機と本質の契機が同一であることが確認できる⁽⁸⁾。仮象のそれ自身における空無性は、本質自身の否定的な本性であり、仮象の直接性は、本質自身の直接性にほかならないのである。したがって、このように同一の二つの契機によって本質と仮象との同一性が論じられるわけであるが、このことには必然的な理由があると思われる。なぜなら、本質が自らに与える直接性という形式がまさしく仮象の直接性にほかならないとすることによって、本質が（仮象においてというよりはむしろ）仮象として現われているということを表現できる。また、本質の否定性が仮象の否定性と同一であるというのは、本質が存在の絶対的否定として登場したことを考えれば、二つの否定性を区別する必要はないわけである。

こうして仮象の規定内容の直接性がいかにして解消されるかという問題に一応の解答が得られている。しかしながら、二つの同一の契機によって仮象と本質が規定されているのであるから、二つの契機が同一であるならば、仮象と本質とを区別する形式上の特徴はなくなってしまう。本質は自己の否定性を否定することによって、自己を直接性として規定する。直接性は否定性に対立する概念であり、直接性は否定性に対して規定関係にはいるから、直接性は否定性ではないという意味で一つの規定性であることになる。この規定性としての直接性が、本質によって成立したものではなく、ただ与えられたものであるならば、本質にとって一つの制約となるであろう。しかしながら、その規定性としての直接性は本質に由来し本質が規定したものにほかならず、したがって、それが本質の制約にはならないように構成されているのである。したがって、「仮象は存在という規定性における本質自身である」(TW6, 22)とすることによって、仮象が本質から有意味に区別されるとは認められないと思われる。しかしながらヘーゲルは、このような仕方では本質と仮象との区別をなしうと考えていたのであるから、本質の循環的な運動の中で現れてくる否定性と直接性のどちらに力点

を置くかによって、両者の区別を記述しようと努力しているのだと見なすことができる。つまり、本質は否定性としての反省であり、仮象は直接性としての反省とされるわけである。しかしながら、論述が本質の契機と仮象の契機を一貫して同一化しようという意図に支配されているので、本質と仮象との区別、ひいては仮象の直接性の存立が明示的ではない。

それゆえ、仮象の直接性、すなわち本質に対する、仮象の独立性の側面を明示するために、外的反省という反省の形態が論じられることになる。外的反省は、直接的なものを「[反省の] 他者」(TW6, 29) として前提し、そこから出発して反省をおこなう。直接的なものを他者とするとは、その直接性を否定性と端的に切り離して捉えることを意味するから、外的反省は先の前提的反省に連なる反省の形態であると言える。このような反省は、「主観的なもの」(TW6, 33) と言われるとおり、他者を与えられたものとして前提しており、他者に対立するものとして「規定されている」(TW6, 28) ものとなる。この反省の規定作用は、この他者には届かない。したがって「外的反省が直接的なものにおいて規定し定立するものは、……直接的なものにとって外的な諸規定」(TW6, 29) なのである。それゆえ、外的反省の存在論的前提は、主観的なものと客観的なものとの対立であり、I で述べたのと同じ二元論的な対立である。したがってまた、外的反省は経験的反省であると言いうるものである。

定立的反省では仮象の空無性が強調され、外的反省では仮象の直接性、すなわち本質に対する、仮象の独立性が強調された。反省の完成形態である規定的反省は、「定立的反省と外的反省との統一」(TW6, 32) であり、外的反省でありながら、なおかつ定立的反省であろうとするものである。外的反省は二元論のうえに成り立っているのであるから、それは不要なものであると考えられるかもしれない。むしろ、定立的反省においては「そこから反省が還帰するところの他者も、そこへと反省が還帰するところの他者もない」(TW6, 26) のであり、この立場は、一元的に存在を本質の関連のなかに解消しているのだから、ヘーゲルの一元論的な立場にふさわしいものだと考えられるかもしれない。にもかかわらず、ヘーゲルははっきりそのことを打ち消している。「定立作用は、……完成された規定的反省ではない。定立作用が定立する規定はそれゆえある被定立存在であるにすぎない。被定立存在は直接的なものであるが、しかしそれ自身に等しいものとしてではなく、自分を否定するものとしてである。それは自己内還帰への絶対的な関係をもっている。それは自己内反省のうちにあるにすぎず、

この反省そのものではない」(TW6,32)。定立作用によって定立された存在は否定されており、本質の自己同一性のなかに止揚されていく空無なものであるにすぎない。したがってこの被定立存在は、自己内反省としての本質の自己同一性と同じ自己同等性をもつべきなのである。つまり、空無な仮象は本質の直接性と同じ直接性をもつべきなのである。ここには定立的反省の欠陥が明らかにされており、この欠陥をうめるのが外的反省に他ならない。それゆえ、二元論を導き入れるかに見える外的反省が反省の論理の展開には不可欠なのである。

規定的反省が成り立っている次元は、定立的反省によって定立される直接的なものが、単に止揚されてしまうのではなく、それが否定を離れた直接的なものとしても留まるという次元に他ならない。言い換えれば、その次元は、いわば二元論を内包しながら二元論を超えているような次元である。

IV 結論

外的反省を二元論的な反省と特徴づけてよいとするなら、当然これをヘーゲルの論理学にそのまま持ち込むことはできない。外的反省と論理学の原理的な相違にヘーゲルが無関心であろうはずはない。外的反省を利用しつつも、それを定立的反省と同等の位置に置きなおす論拠を示さない限り、外的反省と定立的反省との統一、すなわち規定的反省は成り立ち得ないであろう。

この論拠は、確かに外的反省の論述のなかに与えられている。ヘーゲルは、外的反省が直接的なものを前提するものであることを述べた後で、次のような外的反省の第二の特徴を述べている。「しかしそれとともに外的反省は、直接に定立すること、すなわち反省に対して否定的である直接的なものを止揚することでもあり、反省がそこから出発するかに見えた外的なものとしてのこの直接的なものは、この反省が始まることにおいてはじめて存在する」(TW6, 29)。外的反省が直接的なものから出発するように見えても、それが直接的なものであるという規定は反省が始まることによって得られるのであって、そのかぎりで、直接的なものは反省によって媒介された被定立存在であることになる。別の言い方では、「[外的反省は]直接的なものを定立する。その限りで直接的なものは否定的なもの、言い換えれば規定されたものとなる。」(TW6, 29) つまり、直接的なものは直接的なものとして定立されたものであるから、

反省のもたらす規定関係のうちに入り、反省によって規定されたものとなるというのである。直接的なものが被定立存在であり、否定されたものであるということは、本来定立的反省がもたらすのであるから、ヘーゲルはここに外的反省と定立的反省との統一を見ているのである。

外的反省の克服は、極めて形式的な議論の上に成り立っていると言えるだろう。というのも、反省が直接的なものを見出すのは、それを直接的なものとして定立するからであるとするのは、全く形式的な論証に頼っているからである。直接性が無媒介性であり、媒介性と区別されている以上一つの規定性であるという理屈を用いて、直接的なものが定立されたものであるということを示しているにすぎないと考えられるのである。

定立的反省と外的反省との関係は、つまるところ仮象の空無性（媒介性）と仮象の直接性（仮象の本質に対する独立性）の関係に行き着く。仮象が空無であり否定されていることは、本質の否定に基づいている。これは本質との相関関係のなかではじめて仮象が成立しているという点からすると、納得のいかないものではないかも知れない。しかし、仮象の直接性が、自己還帰としての本質の直接性（自己同一性）にほかならないとする点に関してはどうかであろうか。仮象の直接性は本質の直接性と同一であるとされたのであった。しかしすでにⅢ・3)で疑問を呈しておいたように、仮象と本質の区別をなすはずの直接性がその区別に役に立たないのでは、そもそも本質と仮象との関係を論じる意味もでてなくなるのではないと思われる。そこでヘーゲルは、「存在という規定性」によって仮象の本質からの独立性を示すべく、外的反省を利用したと言えるが、これは果たしてどれほど成功を収めているであろうか。なるほど外的反省は、反省に全く依存しない直接的なものを導入するのに役立っている。しかしながらそのためにかえて、外的反省を克服する論拠をも提示しなければなくなる。しかしこの論拠は非常に形式的なものであった。この議論はスケプシス主義や観念論が前提していた規定内容の直接性を越えてゆくことを促すに足るものであろうか。規定内容の直接性は感覚的に具体的なものの直接性であるはずである。するとヘーゲルの論拠に従い、直接性の形式を定立するのが反省であるにしても、与えられている直接的なものの内容に即してどのような定立が可能なのかがよく理解できないのである。そして、このことが可能でないかぎり、直接的なものを反省の彼岸におく外的反省のような立場や、規定内容が直接に与えられているという、スケプシス主義

や観念論の前提に有効な反論はなりたたないと思われるのである。

さらに、仮象の本質からの独立性を示すために外的反省の直接性を持ち込んだことが意図としては理解できるにしても、その直接性が結局は否定されたものであり、被定立存在であるという方向に議論が進まざるを得ないのであれば、外的反省の直接性は単なる見かけであると考えざるを得なくなる。極端な言い方をすれば、その直接性が（それがどれほど必然的なものであれ）ある種の誤った認定に基づいていることになる。すると、本質と仮象との区別を、本質の循環的な運動の中で現れてくる否定性と直接性のどちらに力点を置くかによって区別するという曖昧さが再び問題となる。

ヘーゲルは、本質の否定性から出発しながら、仮象を本質の現れとして位置付け、仮象の直接性が成立し、そしてそれが止揚される根拠を示したのであったが、仮象の直接性を理解させるために、反省に端的に対立する（かに見える）直接性が議論に引き入れられているのである。つまり、仮象（現象）の規定内容の直接性や、反省の彼岸としての直接的なものを理解の前提とすることによってしか、仮象と本質の区別を理解させ、反省の構造を記述する手だてではなかったと言いうる。だとすると、反省論のなかに、ヘーゲルの一元論的立場を崩しかねない異質なものが、前提として入り込んでいるのではないかと思われるのである。

註

- (1) Enzy 3. §114 Anm.

なお、本文中に挙げる略号は、次の通りである。

TW: Theorie-Werkausgabe, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1969–71.

Enzy 1: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1817).

[Sämtliche Werke, Bd.6, Stuttgart, 1988.]

Enzy 3: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830).

[Theorie-Werkausgabe, Bd.8, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1969.]

GW: Gesammelte Werke, Felix Meiner, Hamburg, 1968–.

また、引用中、[] 内は、引用者の補足である。

- (2) Enzy 3. §114; vgl. Enzy 1. §65.

- (3) このことの問題性について啓発的なのは、加藤尚武氏の著述である。「本質は現象する」(『理想』1989年冬号所収)など。

- (4) 精神現象学では、学であるための条件として必然性とそれに由来する完全性 *Vollständigkeit* が挙げられている (vgl. GW9, 56)。ヤエシユケは「思惟規定の運動の内在性 *Immanenz* と整合性 *Konsistenz*」を論理学が満たすべきものとして挙げている。(vgl. W. Jaeschke, *Äusserliche Reflexion und immanente Reflexion*, *Hegel-Studien* 13 (1978) S.86)
- (5) Vgl. Lakebrink, B., *Hegels dialektische Ontologie und die Thomistische Analektik*, A. Henn Verlag, Ratingen, 1968. S.105.
- (6) Ibid.
- (7) これが、ヘンリッヒによって「見かけの上で単純な仮象の直接性 (U_1)」から「反省された本質の直接性 (U_2)」への直接性の意味のずらし *Bedeutungsverschiebung* と捉えられた事態である。(D. Henrich, *Hegels Logik der Reflexion – Neue Fassung –*, *Hegel-Studien Beiheft* 18 (1978) S.248.)
- (8) 本質の契機と仮象の契機とが同一であることはすでに仮象の節で示されていることであるが、反省の節ではその契機が否定性の運動全体の中で位置づけられ、よりはっきりとした見通しの下に書かれている。

〔哲学 博士課程〕

Der Seinscharakter des Scheins und der Dualismus

— Ein Versuch der Analyse der Wesenslogik Hegels —

Naohito TAKESHIMA

Hegel hat die Struktur der Reflexion überhaupt in dem Kapitel 'Der Schein' in seiner Wesenslogik analysiert, und gezeigt, wie Wesen und Schein sich aufeinander beziehen. In dem Abschnitt 'B. Der Schein' oder dem ersten Teil des Abschnittes 'C. Reflexion' (1. die setzende Reflexion) ist die Identität der beiden auffallend, indem sie zwei Momente der Negativität und der Unmittelbarkeit gemein haben. Durch den zweiten Teil (2. die äußere Reflexion) wird deutlich die Selbständigkeit oder Unmittelbarkeit des Scheins, durch die er vom Wesen unterschieden wird. Aber die äußere Reflexion ist das „Subjektive“ und setzt ein Unmittelbares voraus, von dem sie anfängt und erst von dem aus sie in sich zurückgeht. Sie steht als das Subjektive im Gegensatz zum Unmittelbaren als dem Objektiven. Daher muß diese Reflexion überwunden werden, denn Hegels Logik entwickelt sich im Element des unendlichen Denkens, das vom Gegensatz zwischen Subjekt und Objekt befreit ist.

Aber es ist nicht deutlich, ob die Überwindung dieser äußeren Reflexion in der Tat möglich ist, weil sie aus dem bloß formalen Grund geltend gemacht wird, daß die Unmittelbarkeit eine Bestimmtheit und somit ein Gesetzsein ist. Ferner bleibt das Problem unauflösbar, wie Wesen und Schein sich unterscheiden, wenn die durch die äußere Reflexion eingeführte Unmittelbarkeit in Wirklichkeit nur ein Gesetzsein sein soll.

Zusammenfassend können wir sagen, daß die äußere Reflexion überwunden werden soll, aber die Voraussetzung der Unmittelbarkeit unentbehrlich und zugleich unwiderruflich bleibt, um die ganze Struktur der Reflexion aufzufassen und zu beschreiben.